

## 樋口芳麻呂先生を偲ぶ

寺尾 剛

本学名誉教授樋口芳麻呂先生が、平成二三年十月一日に御逝去された。享年九十一歳であった。

先生は申し上げるまでもなく和歌研究、王朝文学研究においてわが国屈指の研究者である。その長年の御功勞が高く評価され、平成九年秋の叙勲において勲三等旭日中綬章を受賞されたことは、未だ記憶に新しい。

我々本学文学部国文学科・大学院文学研究科の歴史においても、先生の御名前は永遠に不朽のものである。先生は、すでに愛知教育大学在任中の昭和五七年より本学に非常勤講師として教壇に立たれ、その三年後の昭和六〇年には本学文学部教授として着任された。本学にとつてとりわけ忘れられないのは、平成元年四月からの先生の粉骨碎身の御尽力である。まだ歴史の浅いわが国文学科の主任として四年間在任するかたわら、同年に開設された大学院文学研究科の科長（八年間在任）をも兼務され、その果てしてもない激務をこなしつづけられた御尽力には今も猶お頭の下がる思いがする。先生なくして今日の国文学科、あるいは文学研究科はありえなかった。

私事で恐縮だが、少々思い出話をさせていただければ、私が本学着任早々、先生に御挨拶申し上げた際、先生は、もう私の論文すべてを丹念に御覧下されたことであつた。しかも、「面白かったですよ」と一言、にこやかに御褒め下さつたのである。当時の私はまだ大学院を出たばかりのひよっこで、論文など数篇しかなかったし、しかも分野が中国文学で

ある。まさかこのような激励の御言葉を国文学の泰斗でいらっしやる大先生からいただけるとは夢にも思っていなかった。全身に震えるような感激を覚え、目頭が熱くなったことを今も猶お昨日のように記憶している。また、先生の御学問の奥深さに驚嘆した思い出も数多くある。ある時、私が門外漢の無遠慮から、『唐物語』の中の和歌の評価について伺った際、先生が瞬く間に数首の和歌をすらすらと諳んじて、的確にアドバイスして下さいました時には、その記憶力と分析力のすごさには開いた口が塞がらなかつたものである。先生にしてみれば常識中の常識だったのかもしれないが、私にとつてはまさしく驚愕であつた。また、御退職後のことであるが、ある晩、突然先生から御電話をいただいた。それは白楽天詩の解釈についての御質問であつたが、御話を拝聴するにつれて、先生の中国古典文学に対する造詣の深さにただただ敬服するばかりで、むしろ最後には私の方が教えを乞うようなことになつてしまつた、という思い出もある。

先生はとにかく御優しい方であつた。いつもにこやかに学生達や我々若輩者に対して接して下さいました。しかし、その先生の御優しさの中に、先生の学問に対する厳しく鋭い眼差しが常に宿つていたことは、誰もがよく承知していたことと思う。先生は紛れもなく永遠の学究者である。

先生！先生の元から旅立つていった数多くの学生達が、今も猶お先生の御遺志を胸に抱いて社会で活躍しているはず。また、研究者として先生の御偉業を継承している方々も数多くおります。今、そのような方々を代表して先生への感謝と哀悼の意を述べさせていたたくのは洵に僭越かとは存じますが、改めて申し上げます。先生への。

先生、本当に長い間、ありがとうございます。

そして、心より御冥福を御祈り申し上げます。

(文学部国文学科主任)